

---

# 始まりの物語

T 2

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
始まりの物語

【Nコード】  
N0983W

【作者名】  
T2

【あらすじ】  
始まりはある少年の死。そこから物語は始まる。

## プロローグ（前書き）

T2です。

素人の処女作なためおかしなところが有るかもしれませんが温かい目で見てください。

それでは、「始まりの物語」スタートです。

## プロローグ

「ここは何処だ？なんで真っ白なんだ？」

気が付いたら俺は知らないところにいた。

『良かった。気が付きましたか。』

そして、俺の前には知らない美人。

「あんたは、誰なんだ？なんで俺はこんなところに居るんだ？教えてくれ。」

状況がわからなければどういう行動をしていいか判断もつかないからな。

『……わかりました。教えます。ですがこれから話すことは全て本当の事です。』

(…ゴクリ)

その美人の真剣な表情に俺は息を呑んだ。

『まず、私のことは神様とでも呼んでくださいね。それでは、本題について話しましょうか。とりあえず、貴方の質問に答えることにしましょう。ここは、「世界の果て」と呼ばれる神の座です。そして、貴方がここに居るのは私のミスが原因なのです。』

「……………え？」

美人の口から出た言葉に俺は言葉を失った。

「だから、貴方がここに居るのは私のミスが原因なのです。」

「な、なんだってー!!」 「本当にごめんなさい。お詫びに貴方をアニメの世界に転生させます。」

その言葉に俺は舞い上がった。

「本当に良いの？原作ブレイクとかしちゃうよ。」

「もちろん、大丈夫ですよ。」

更に、調子を良くする俺。

「なら、能力とか頂戴。」

「五個までですよ。」

「それじゃこういう能力でもOK?」

「はい、大丈夫です。それじゃ、能力を付与しますね。目をつぶってください。」

(ドキドキ…ドキドキ)

チュッ

俺の唇に柔らかい何かに触れた……。

「え、えええ( ;。。」

「これで終わりです／＼それでは出発です。良い旅を。」

そして、俺の足元に穴が開いた。

「神様のバカッ!!!」

## プロローグ（後書き）

という感じで始まりました。「始まりの物語」作者のT2です。小説なんて初めてなので色々バカをやらかすかもしれませんが、何とぞよろしくお願いいたします。

## 日常 1（前書き）

大変遅くなりました。すみません。

良ければどうぞ見てください。



## 日常 1

（暗いな。）

ミシッ

（痛ッ。）

ミシミシ

（痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い…）

頭を襲う激しい痛みで気絶する瞬間、誰かの声が聞こえた気がした。そして、俺の意識は落ちた。

「おやすみなさい。私の恭助。」

目が覚めるとそこにあつたのは、

「うああうああ（知らない天井だ）」

…あれ？

「ああうあ？（なんで？）」「

しゃべれないんだ――！！！！！！！！

俺が混乱していると誰かが入ってきた。

「おはよう、恭助。」

優しい声だな…何でだろうとても心地いい…。

「それじゃまずはご飯ね」

え？

その人は俺を抱っこして…

O T Z

何があつたかは訊かないでくれ。敢えて言うなら美味しかっただけ言っておこう。

「次はオムツを換えましょうね。」

え？それだけはマジで勘弁してください。

いや、マジで後生だから…

アア――――――――――O T Z

何か人として大事なものをなくした気がする（涙）

そんな感じで五年が過ぎた。

五年間に何があったか教える？ただ人として大事なものがガリガリと削られただけだ（泣）

そして、三年ぐらいたったところある重大なことに気づいたんだ！！

それは、ここが『リリカルなのは』の世界だってことだ。

なに？リアクションが薄い？仕方ないだろう。だってここがあの魔王様の世界だ。『なのは魔王じゃないもん』…なんか幻聴が聞こえた気がしたけど気のせい木の精ドリアド。あれ？話ずれた？まあ気を取り直して、この世界が魔のゲフンゲフンなのはの世界だって気づいたのは家の隣が翠屋だったからだ。

そして、k「恭助」。なのはちゃんが来てくれたわよ。」はあ（

。 - ） 3

「わかった。今行くから！」

待たせるのも悪いから行くとしますか。

## 日常 1（後書き）

短いですが頑張ります。

## 日常 2（前書き）

ブルック様感想ありがとうございます。

こんな駄文ですが見てください。

## 日常 2

「恭助、なのはちゃんが来てくれたわよ。」

「はい。今行くから。」

俺が立ち上がってドアに向かった、その時!!

バン!!

ものすごい勢いでドアが開かれ、そして誰かが勢い良く俺の胸に飛び込んで来た。

「恭助君!! 遊びに来たよ!!!!」

それは、なのはだった。

人によってはこの状況に嫉妬する者も居るだろう。だが、もう一度状況を整理してみよう。

勢い良くドアが開く

なのはが飛び込む

俺の胸に直撃      今ここ

結果、勢いを殺せず俺吹っ飛ぶ。

更に、運悪くベッドに頭を直撃。

「ぶげらっ。」

即ち俺、気絶。

「大丈夫！？恭助君。起きて死んじゃ駄目だよ！！」

嗚呼、お花畑が見える。

「目を覚まして！！恭助君。」

「あらあら、大丈夫よなのはちゃん。この子意外と丈夫だからちよつとやそつとじゃ死なないわ。」

そんな問題じゃ無いだろ母さん。  
そこからの記憶がない。

## 日常 2（後書き）

どうでしたでしょうか？

またこれからもこんな感じで進めて行きたいと思います。



## 始まる物語（前書き）

遂に原作に突入？

## 始まる物語

平和な日常は終わり3人の少女たちの物語に1人の少年を加えて、遂に舞台の幕は上がる。

彼らの人生という台本の無い舞台が今、始まる。

あれから 数年が経ち、俺は小学3年生になった。なのはは原作通りアリサとすずかと友達になれたようだ。

でも、俺はあいつらとは違うクラスだ。もともと目立つことが苦手な俺が、あいつらと一緒にいると嫌でも目立ってしまう。それだけは避けたいところだ。

なのはとも昔はよく遊んでいたけど、あいつが心から笑わなくなつたあの時からあいつとは疎遠になってしまった。無理矢理に笑っているあいつを見ると俺の胸は痛かった。

今は吹っ切っているようだけどあいつと俺との関係は切れてしまったままだ。

いや、たぶんこれで良かったんだと思う。この物語はあいつらのための物語だ異物である俺の出る幕は無いだろう。

そういうわけで俺はできるだけ目立たないように学生ライフを謳歌している。

なにも、なのはたちと行動を共にしなければ幸せで無いと誰が決めたのだろうか？

このまま、普通に生きても良いかなと思ってしまふ俺が居ても悪くないと思う。

何はともあれ、こんな感じで俺は毎日を過ごしていた。  
そして……………

運命の物語はひとつの助けを求める念話により、始まった。

## 始まる物語（後書き）

すみません。更新が遅くなりました。

最近、部活が忙しくなかなか執筆できませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0983w/>

---

始まりの物語

2011年11月11日07時34分発行